

大震災の想い出

井 上 英 一

今より四昔前あの関東大震災当時の経験を筆にする事とする。

それは忘れもしない大正十二年九月一日正午にグラグラと来てから一週間後の事であった。

それにしても今日はまた馬鹿に良い天気で空からはニクラシイほど太陽がカンカン照りつけていた記憶がいまだ忘れない。

その当時私は帝國ホテルに勤めていた。

「故郷の栢山はどうなったろうか？」

妻の実家の家族達は？と心配になって来たので近所の自転車屋に事情を話し無理にお願いして一日だけという約束で借り受けに成功した。

そして道中朝鮮人襲撃を覚悟でまたその反対に道々の住民から当方が朝鮮人と間違えられないようにするのが一番大切の事だとそれぞれ準備をしたのである。まづ前の問題は木刀一振り用意すればよろしい。

私は剣道には自信があるからである。

それから後の方は箱根の富士屋ホテルに滞在の外人客に急用のため行くんだとの名目でホテルから証明書を貰いそれに麹町警察署の身分証明書を用意するという具合で仲々おさおさおこたわりなかつたらしい。

弁当は握り飯、そしてホテルを出発したのが夜も白らじらと明け行く頃の五時であつた。

道中つがなく東海道を西へ西へ小田原迄と書きたい

のだがそうはいかない。六郷の手に差しかゝつた時ドカドカと両側から飛び出して来た五、六人が僕を取り囲んだのである。「止めどどこへ行くんだ？」「アッ、日本人らしいぞそれでは君が代を歌ってみろ！」

「え？警察の証明書を持っているのか、そうかよろしい」と言つた具合で御許しが出た。誰からも頼まれもしないの

に、ほんとに御苦勞様的事です。

無事通過が出来たので一人苦笑しながら、暫く行った所に交番があつた、丁度御査りさんがいたので、今の話をする

「そうですよもうすぐ朝鮮人が六郷橋の向うから来る」と言うものだから、皆んな緊張しているのでしょう。だからあなたも氣を付けて行つて下さい。」

政府の御査りさんですら朝鮮人が押し寄せて来る。そして井戸と言う井戸へ毒薬を投げ込むから飲み水に氣を付けるようにと誠しやかに住民に呼び掛けている始末。

これでは誰だつて信ぜざるを得ないだろう。やがて橋を渡つて東神奈川の宿あたり、両側のどの家も前ノメリしてベチャッコも一週間もたつて末だどの家でも片付るようすも見えず只オロオロと日を過しているらしい。

こんな状況下に在つては無

理からぬ事でしょう。

道路でのけい、かいも段々とはげしくなるばかり、横浜

保土ヶ谷、戸塚、大船、藤沢、辻堂、そして茅ヶ崎、

平塚、大磯、二宮と例の証明書によつて無事通過は出来ました。

妻の実家は二宮在の井ノ口と言う山に囲まれた部落にあり、二宮町から一里の道ほど、家に段々と近づくにつれ自転車のペダルもますます好調子、これも昔取つた自転車乗りの選手だけに自信があつたのであるがはるか彼方々目的の家が見えた瞬間ドット疲勞を感じ戸内に飛込んだ時はコップに水をガブガブごちそうしてもらいやつと落付が出来たような始末。

時に時計の針は十時少し前であつた。家族のかたがたはいずれも大元氣のようす

「ヤ、よかつたですね、皆様の御無事の顔をみてこれですと無理して来た甲斐がありましたよ、

え、東京でも君代をはじめみんな安泰ですかどうぞ御安心下さい。そして家を見廻してみても別段こわれた箇所も見当ら

ず普段のまゝの状態故全く安心しました。「こゝへ来る途中どこでも朝鮮人の襲来に氣をつけるようにと言っている。こちらはどうですか？」

「交番からの御達しで村の青年団がたのけい、かい当っているようです。朝鮮人は恐いですね、あゝいやな世の中になつた」と母はつぶやくのでした。

これを聞いて私はその真実を内ち明けました。即ち次の通り

永らく通信大臣等を歴任せられた後藤新平伯は丁度十二年九月二日に山本権兵衛内閣の誕生の時内務大臣となられました。所謂地震内閣と言ふ可き性質のものであるのであらう。

この後藤大臣が発案されたのが朝鮮人襲来のデマの本家でありませう。

この関東地方は全襲に等しい、人民は混乱に混乱を重ねてますます不安となつたこんな場合食糧はますます不足を来たし、身内の者達の間においてすら食糧のうまい合、自分が生きるためにはほかの人はどうでもよいと言ふ具合で理性は全く無く人情等は通用もしな

い、まるで原始人時代の動物的本能に逆戻りした様相を呈して来ました。これではいかん。と考えられたのがさきほど書いた朝鮮人襲来説です。

即ち日本人同志の間で前述のごとき、実に見にくいような行為を平氣でしかず人間も、いざ外国人と言ふ言葉を聞いただけでも、もう救が心をやくり起し我々は本人同志一致団結の心境に立ち還るのが日本人の真の心境である。

その真理を良くとらえられたのが後藤閣下です。直ちに警視庁に行き首役のかたと相談の結果全関東地区の警察へ

朝鮮人がむはんを起して占領しようとしている。各所の井戸に毒薬を投入して日本人を全滅しようと計画し実行しているから各警察では部所を嚴重に警戒して欲しい、そして地区の青年団、消防団を急使して直ちに善処せよ。

そして彼等を見つけた警察に留置すべし。と言ふもの。

これでは誰だつて信じない人はいないでしょう。いやしくも、警察官自身ですら真

くも、警察官自身ですら真

実と思っているから、まして未端の平民はそれは大変だと大騒ぎするのは無理からぬ事ではあるまいか。

それにしては後藤大臣こそ実に偉大な政治家である。加藤家の人々に話をしていける内に早や一時間は経過してしまつた。

これから、栢山の実家へ行ききょう中に東京へ自轎車で帰らなければならぬので名残りおしい気もするが引き上げる事となつた。

さうなら、と元氣を取り戻して車上の人となつた。そしてさきほど来た道に戻りながら降り坂を足も身も軽々と鼻歌でも歌いながら二宮方面へと向う。

やがて国府津を通り抜けて親木橋を渡り矢作を経て中堀の村越家の前を通過して酒匂川の富士具橋を渡り漸く一時項目的の栢山の家へとどり着いた。

このところ迄来る同村の顔見知りのかたがたとどこどころで出合つたや／御氣嫌よう、元氣かね、東京は地震の災害で全滅と聞いたがどうですか？よくこままで自轎車で来られたね。

御宅でも家はやられたが皆さん丈夫ですよ、早く行っ

ておあげなさいまし、見れば今日迄であつた大きな門はベテランコになり、ひざまづいて前のべりをしている。よく見るとその中に入つて寝ている。これが母であつた、ちょっと心配になつたが、「英一ですよ／東京から来たんだ」と声をかけるとムツクと顔を上げげんなようす、しばらくしてやっと我れに還つたような顔付をしてニコリ「よくまあ」と言つたきりあとは無言が続く、目をおも家の方へ向けると子供三人出て来て「ヤ、どこかのおじちゃんが出来たよ」と言いながらこちらへ向つて駈けて来た。その内から姉の梅子がノコノコ出て来て

「マー、英一ちゃんないのめずらしいわね」と言いながらそばへ駆寄ってくる「御近所の子供さん／この人は東京へ行つて居る。この家のお叔父ちゃんだよ、おじぎしなさい」と私の姉に言われて初めて判つたように三人揃つて、ベコンとおじぎした。

そのシワザがいかに自然

で可愛らしい。しばらくして、姉の案内で屋敷を一廻り見て歩く、なほどこかはひどい、百坪以上もあるオモヤは四十五度に傾き、二階建の三十坪の土蔵も全部の壁は落ち、実に惨々たる被害である。

しかし一人住の母の身に怪我すらなくて元氣であつた事は何と云つても不幸中の幸とでも言うべき事だろ、これは神の御比護の賜しか受けとれぬ。

日常御先祖の靈を信する母はこんな時に救はれるのだ。そして千坪もある庭は今迄のおもかげはなく築山の岩石、寇門等はめちやめちやになり衰れなものである。その内お茶が入りましたよとの知らせで倒れた門の仮住居に入つてごちそうになつた。

あ、思へば自然の偉大さを目の前に見せつけられ、父をととの昔、亡つた私達は、今後この無惨な現実をどう切り開いたらよいであろうか。

あれやこれやと考へている内に時間はドンドン経つて行く。

是非でも今日中に東京へ歸るのだ、歸らなければな

らないのだ。ほんとうに短い時間でおし気がするが、今日は一まづお別れしました近いに交通もよくなり、周囲の事情がよくなりしだい来るからと言ふ事で、この二、三時間間の幸福を味つただけで別れる事にしました。

そして姉は近くの小田原に住んでいるのでくれぐれも母の面倒を見て貰うよう御願ひした。

その時消防団の一人が前通りを駆けながらドナツて走つて行く。

「松田の十文字橋の向うから朝鮮人の一隊が橋を渡つて来るぞうだ警察から連絡があつた、皆な氣をつけるように、」

吉田島あたりで朝鮮人が三人青年団の者に竹槍でやられたぞうだよ」

私は「そんな事はないよ、そんな流言は政府が出しているのだから、皆んな安心しなさい。」

だつてその現実を誰一人見な者はないだろう。だから不思議じゃないか、地震があつて今日で一週間も過ぎているのに。

これからの私達の使命は復

興と、そして将来へ向つて前進するのみだ」と家人に話したがいまだ先日この事件で心がおびえているせいか誰も信じてくれそうもない。

それはど緊張した世相であつた。それにしても今日は九月の初旬、夕方ともなれば秋風もそろそろ身にしみる頃と

興と、そして将来へ向つて前進するのみだ」と家人に話したがいまだ先日この事件で心がおびえているせいか誰も信じてくれそうもない。

それはど緊張した世相であつた。それにしても今日は九月の初旬、夕方ともなれば秋風もそろそろ身にしみる頃と

濠端所感

清水専吉郎

- 桜花忽散行楽刻
- 躑躅濠堤朱橋学
- 大名行列阜月空
- 城跡不変松楨緑

記念歌三首

小田原藩後期大久保二代城主忠増の時代に播州中島邑（今の高砂市）の御領地に一九四四郎高重が代官として徳政を施す現に其祭祀が続き本年二百五十年の記念祭が八月二十日に執行はれ其一族が参列し後裔一九光治氏の姉草場きよ子刀自が其感想の和歌を示されました。

- 記念樹の松のみどりは色まして
- 二百五十年の祭り賑しく
- 高砂の市長名士の式辞あり
- 一九代官の徳しのびあり
- 大銀杏一丸廟よ村人よ
- 昔の名残り祭り祭の中島

因に一九代官につき小田原正徳寺と北条市かまへ町西岸寺に其文獻ありと。昨年三月二五日発行の小田原史談四十四号に市九代官の記事掲載しあり。(清水記)

小田原史談

第49号

発行所 小田原史談会
小田原市城内3-22
郷土文化館内

室町時代の久野道場 総世禪寺再建さる

——落慶は十月二十日——

小田原市久野諏訪ノ原にある、阿育王山総世寺は、今次大戦後の昭和二十三年春、付近で起った昼火事の火ノ子をかぶって全焼してしまつた。以来庫裡の一部を仮本堂として今日に至つたが、昨昭和四十一年五月再建の工事を起し、このほどようやく落慶のはこびと

協決して作った禪の道場であつた。明応四年、伊豆の早雲庵宗瑞と伊勢新九郎長氏によつて、小田原大森氏は滅びたが、久野に居館を持つた長氏の子幻庵長綱によつて総世寺はかわらぬ被讓をうけ、さらに江戸時代を通じて禪の道場として栄えてきたものである。

伊豆葦山と山木遺跡見学

八月十日葦山町役場会議場にて葦山史談会長大原菊太郎氏の歓迎の挨拶に次いで内野葦山町長の小田原と葦山とは北条早雲の関係に由り密接の間柄であり今後共宜しく交誼ありたしとの

八月十日葦山町役場会議場にて葦山史談会長大原菊太郎氏の歓迎の挨拶に次いで内野葦山町長の小田原と葦山とは北条早雲の関係に由り密接の間柄であり今後共宜しく交誼ありたしとの

江川邸に戸羽山瀨氏の案内にて江戸時代よりそのまゝの代官屋敷の座敷、古文書を見開し、同氏より、北条興亡、江川太郎左エ門の実蹟の講話あり、中食後、兼て此度の行事に輪旋された

阿育王山総世寺は、室町時代の末、嘉吉元年(一四四一年)の創建である。開山は安叟宗稜禪師といふ、足柄上郡と東駿の一部に勢力を張つた土豪大森頼明の子供であつた。開基は頼明の孫の大森氏頼で、叔父甥

迎辞の後、山田梅軒氏より江川坦庵の文才と経綸の非凡に優れたるを聴き、それより葦山史料館へ赴き、出土品及び江川坦山の書画と使用具の数々を見て隣接の

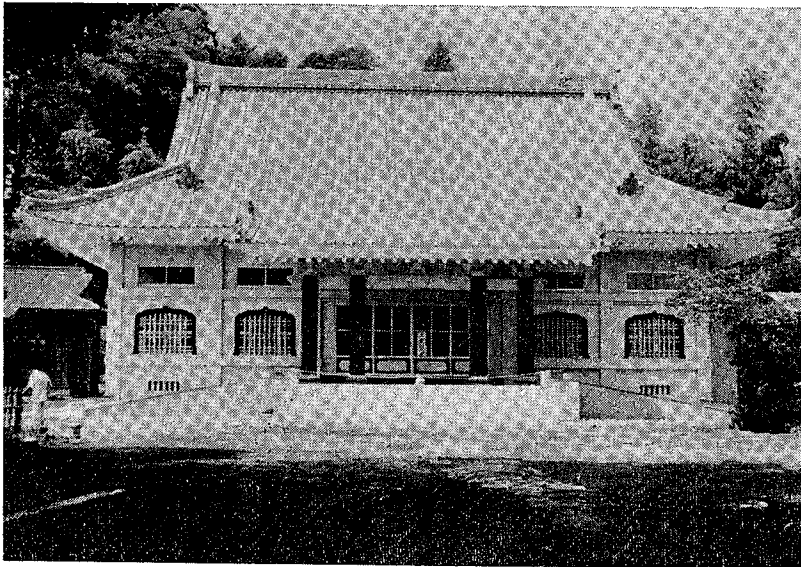
て此度の行事に輪旋されたる本会顧問の難波明氏の案内にて山木遺跡の現場に発掘状況を軽部博士と山田助手の解説にて千七百年前の弥生農耕の歴史を掘下けつゝある作業有様を目のあた

り偲び、転じて葦山城跡に登り、北条と大關との攻防の戦いの様相を語り合い、軽が小島一もとの松の下なる碑を道脇に見つ、反射炉にバスを急ぎ、鳴滝に着き反射炉を見上げて江戸時代

の原始熔鋼炉を転た感懐深く重ねて江川坦庵の偉業を偲び帰途に就きました。当日参加者、井上会長、難波顧問、清水副会長等二六名、氏行に度々人員点呼し

待ち合せ遂に一人離れ後に帰宅せられましたが一同心配しました。団体行動に自らも責任をもつ事を痛感しました。

(清水記)



阿育王山総世禪寺
落慶間近い本堂正面